水なし化の効用を体感

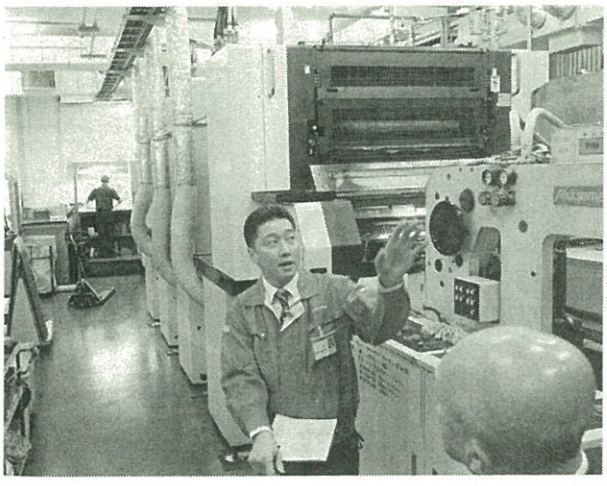
北東工業の見学会

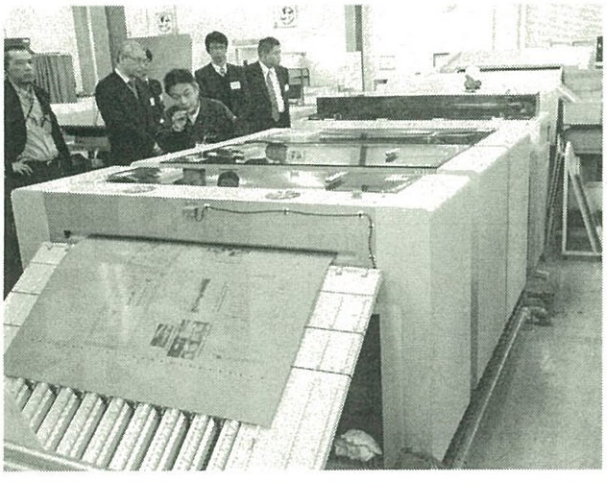
FFGSイノベーションセミナー

会社再構築の原動力に

富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(FFGS)大阪支社(藤嶋克則支社長)は3日、北東工業(東條秀樹社長、大阪市)の本社と東大阪工場で「水なし印刷」のセミナーと現場見学会を開催した。そこでは、リストラの後遺症や主力印刷機の老朽化という逆風を「水なし印刷」で跳ね返した経緯や、世界初の「水なしLED－UV」の実現に至るまでの苦労話が明らかにされた。

東條社長（右端）と水なし印刷スタッフ





◆リストラと水なし印刷

最初に北東工業の東條社長による「わが社の経営と水なし印刷」と題したミニ講演が行われた。

東條社長は開口一番、「創業者の父から経営を引き継いで8年は、リストラしかしていない」と、同社の飛躍的な発展の原動力になった製版のオープンショップ展開が下り坂に入った時期に経営を引き継いだ苦労話から始めた。

「一から出直し。第二創業しかないと思い切ったリストラを断行したが、当然ながら現場のモラルダウン、ベテラン社員の退職などかなり厳しい時代が4、5年続いた」と述懐。

ここで同社長は、社内イントラネットに組み込んでいる「事故報告書」に話を転じた。これは、事故内容をリアルタイムで報告し、対応措置、損失額、原因、再発防止策とその効果などをすべてオープンにして社員全員で共有しようという仕組みで、「現場の改善はもとより、会社の意思決定を行う上で大きな役割を果たしている」とその効果のほどを明らかにした。

その中で、判明したことの一つが裏移り・ブロッキング事故の頻発だった。原因はベテランオペレータの退職に加えて印刷機の老朽化があったという。おいそれと新台への切り替えもできない中で、見学した先が、廃棄寸前の老朽機を水なし印刷で蘇生させたウエマツ（福田浩志社長、本社・東京都豊島区）だった。自社と同じ古いダブルデッカー機（アキヤマ製）が水なし方式で順調に稼働している姿を目の当たりにして、自社でも取り組むことを決意。それから数ヵ月の内に、水なし印刷コンサルタントのタケミ、FFGS、東レ、都インキの協力を得て主力機2台の水なし化に成功し、新台の菊全4色機は最初から水なし方式を採用した。次いで、2013年3月からは新規導入した菊半裁LED－UV4色機（桜井グラフィックシステムズ）の水なし化に取り組み、1年4ヵ月を費やして実用化にこぎつけた。その間、ジャパンカラー認証も取得した。

こうした一連の「水なし化」を振り返って東條社長は、「正直言って環境に優しいからといった高尚なことではなく、ベテランの職人がいない、機械が老朽化した、さあ、どうしようというところから始まった。その結果、億単位の新規設備をしなくてすんだ。さらに、職人技的な水のコントロールが不要になったおかげでスキルレス化が進み、それが極めて合理的なジャパンカラーという標準化にもつながった。印刷事故が減ったことで現場の空気も明るくなったし、新しいことに取り組み成果を上げることでモチベーションも上がった。確かにインキや版代は割高になったが、効果の大きさを考えれば問題にならない」と水なし化の波及効果を力説した。

続いて、水なし印刷のコンサルタント会社であるタケミの柴崎武士社長が「水なし印刷のQ&A」と題して、印刷機の日常的なメンテナンスの励行、刷版やインキなど印刷資機材の改良といった必要条件と水なし化によるトラブル解消やスキルレス化といったメリットの数々を明らかにした。

このあと、東大阪工場に移動して、水なし印刷の現場を見学。参加者らは、リノベーションに成功した老朽機や最先端のLED－UV機による水なし印刷の実際と印刷物を興味深そうに見入っていた。